

シャニP、女になるって
よ

朱羽瑠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくある女体化ものをシャニマスのプロデューサーで

目

次

第一話
第二話
第三話

38 17 1

第一話

——目が覚めて最初に感じたのは強烈な眠気と軽い違和感だつた。

時刻は六時を幾ばくか過ぎた頃、春先のこの時間故、外はまだ夜明けを示したばかりで日は完全に昇りきつておらず、わずかに白い空に星がまたたいていた。

しかし”男”にとつてはこの時間に起きて出社の支度をするのは珍しい事ではない。

世間的には休日と言われる曜日ではあるが常に忙しいこの男には当てはまらなかつた。

眠気眼を擦りながら、先程からけたたましく鳴り響くアラームを解除しようと枕元に置いてあるスマートフォンを手に取る。

いつもなら一回か二回で成功するロック解除の為の指紋認証がいつまで経つても成功しない事に違和感を覚えた所で、”男”はその違和感の正体にようやく気付く。

「——あれ、なんだこれ……」

自分の手とは思えないほど白くきめ細やかな小さな手が、大画面で見やすいからとい

う理由で選んだ大きめのスマホを実際に心もとなく支えていた。

普段なら片手で持つても親指が画面の端まで届くのに、今の自分の手では片手操作はおろか保持すら難しいのでは、と感じてしまうほどだ。

ひとまず両手持ちに切り替えてパスワード入力でロックを解除し、先刻から流れ続ける事に成功する。担当アイドルのユニット曲がサビに入り掛けた所でようやくアラームを解除する事に成功する。

薄暗い部屋が再び静寂に包まれ、一息付いた所で”男（？）”は第二の違和感を覚える。

着ている服があまりにも大きすぎるのだ。

寝間着用のTシャツと短パンなので、多少はゆつたりとしたサイズのものを着用しているが、それでも襟ぐりから肩がはみ出そうなほどぶかぶかだつたら寝起きの頭でも流石におかしいと気付く。

以前の冬の折、担当しているアイドルが事務所の屋上に行つて「雪を見たい」と申し出た時の事を思い出す。彼女が風邪を引いてはいけないと思いデスクチエアに掛けておいたコートを貸して着させた上で許可をしたのだ。

自分で言うのもなんだが、体格にはそれなりに恵まれている方だと思っているのでその時は女の子が自分の服を着たらここまでぶかぶかになるのか、と笑つたものだつたが、今の状況はそれにかなり酷似している――

そこまで考えて、ありえない予感めいたものがふと頭をよぎる。

「まさか、な……？」

答え合わせをするかのように自分の胸元に手を伸ばし、震える手でそこにある筈の硬い胸板に触れようとする。

——むにゅ

予期した感触は帰つてこず、代わりに柔らかくて弾力のある、その”男(?)”にどつては全く未知の感触が手に伝わってきた。

先程まで頭をよぎつていた嫌な予感がほぼ確信に変わる。

「嘘だろ……？」

思わず口に出た声は野郎の低い声ではなく、透き通るようなソプラノボイスで。

脚を思いきり伸ばすとはみ出でてしまう程窮屈だつたベッドは丁度良い広さで。ツーブロック風味に短く整えていた髪の毛は背中に届きそうな程で。

まるで刑事ドラマでよくある犯行の証拠を突き付けられた犯人のような気持ちにな

る。

というか、どう考へてもこれは……

「女の子に、なつてゐる、よなあ……」

人間、とうてい信じられないような事が起ると却つて頭が冷静になるもので。

その男、ではなく”女”は自分に起つた出来事をまるで他人事のように感じていた。

いや、まさしく自分が自分でなくなつたのだから他人事と言つてもいいのかもしれないが。

そんなくだらない事を考へつつ、ひとまず顔を洗つてトイレにでも行こうかと思い。やけに軽くなつた四肢を起こして洗面台へと向かう。

そこで鏡に映つた自分の姿を見て、女は顔を洗うまでもなくバツチリ目が覚めた。

以前の自分の顔立ちの面影を少しだけ残しつつも、パーツの整つた、控えめに言つても可愛らしい、と思える風貌の女性がそこにいた。職業柄、可愛い女の子と接するには慣れている自分でさえ、街中で見かけたらスカウトするか真剣に悩むであろう程だ。顔ペタペタ触つたり、少しポーズを取つたりすると、当然鏡の中の女も同じ動きをする。

ここにきて、女は思わず膝をついて肩を抱き、言いようもない恐怖に身を震わせる。

まるで他人事のように感じていた「女になってしまった」という現実が重くのしかかつた。

これからどうすれば良いのだろうか、仕事は？家族への連絡は？これまでの身分は？先の未来への不安ばかりが頭に浮かび、激しい動悸で胸が苦しくなる。

そのまま気絶するように瞼を閉じた。



いつたいどれだけの間そうしていただろうか、相変わらず不安ばかりが頭に浮かぶがとりあえず起こつてしまつた事はしようがない、と持ち前のポジティブ精神を發揮しひとまずは目先の問題、より具体的には先程から感じる尿意を解消してから考えよう、トイレのドアを開けて便座に腰を降ろし、ズボンを降ろそうとする、が

(こうなつたつてことは多分、"ない"んだろうなあ……)

正直、ズボンを降ろさなくともそこにある筈のものが無いという事実は感触でなんとなく察することができます。しかし、この目でそれを確認する決心がまだ付かずについた。二十数年余り、苦楽と共に味わった友を失うという想像を絶する悲しみを享受するのには本来ならもつと心の準備が必要だ。

しかし、このままでは用を足す事さえできない。観念しろとでも言わんばかりに尿意が我慢できないレベルにまで達し始めているのを感じる。

尿意が我慢できないレベルにまで達し始めているのを感じる。

(覚悟を、決めるしかない)

観念してズボンを降ろし、溜めていたものを解放する。

(うわ、思ったより飛び散るんだな……)

かねがね、母親や担当アイドルの化粧室に入っている時間がやたら長いなと思つていたが今ならその理由も頷ける。みんな苦労していたんだなあ……

今ならその理由も頷ける。みんな苦労していたんだなあ：

ちなみに、目を逸らしていたのでちらりとしか見えなかつたが、つるつるだった。



「さて、これからどうしたものか……」

ひとまず目先の問題を解決できた事に僅かな達成感を感じながら自分の部屋に戻り、
目先の方針についてあれこれうんうんと考える。

(こんな格好で出社……は無理だし、とりあえず今日だけは休みを貰おう。幸いにも重
要な打ち合わせとかはなかつた筈……だけどなんて理由を付ければいいんだろうか。
適当な嘘を付いて誤魔化しても、結局はバレる事だし……)

重要な打ち合わせとかはなかつた筈……だけどなんて理由を付ければいいんだろう

か

適当な嘘を付いて誤魔化しても、結局はバレる事だし……)

具体的な方針を立て始めた所で、事の厄介さに漸く気付く。

いつその事別の人間にでもなつていたならまだしも、あくまでこの世界での自分はまだ男という事になつていてる筈なのだ。その証拠に、免許証の写真は男の頃の自分のままだ。

(素直に打ち明けるしかないか……？ 社長やはづきさんなら、真剣に訴えれば信じてくれるかも知れないし、それに……)

信じてくれるかも知れないし、それに……)

目を閉じて、アイドルのプロデューサーという仕事を始めてからの記憶を蘇らせる。研修が終わつた翌日に、アイドルの原石をスカウトする為に街中を走り回つた事。

事務所でコーヒーを飲みながらオーディションの応募資料を徹夜で作つた事。

きらきらの衣装を身にまとい、ステージで光り輝く自慢のアイドル達の姿を見た時の事。

勿論、楽しいことばかりではなく苦しい事もあつた。

オーディションに受からず涙を流す程悔しがつた日もあつた。

コミュニケーションに失敗してすれ違つた日々もあつた。

仕事でミスをして色んな人に迷惑を掛けてしまつた事も……。

それでも辞めたい、と思つたことは今まで一度もなかつた。

担当のアイドルをWINGという大きな舞台に連れていくことができた時のあの笑顔を、喜びを、今でも昨日の事のように鮮明に思い出す事ができるのがその理由だろう。

(……うん、身体は変わつてしまつたけれど、心はまだ俺のままだ)

少なくとも自分のやるべき事は変わらない。

後は皆がこの事実を受け入れてくれる事を祈るだけだ。

それが認識できたからか、先程までの迷いが嘘のような、決意を固めた表情を浮かべる。

(変な夢でも見たのかと言われたら困るし、事務所への連絡はもう少し時間が経つてからにしよう。それよりも、今、俺がやるべきことは……)

経つてからにしよう。それよりも、今、俺がやるべきことは……)

改めて、部屋に立てかけてある姿見に目をやり今の自分の姿を確認する。

折角顔立ちもスタイルも整っているのに、髪はぼさぼさな上に服が男物なので、かなり残念な女という感じだ。

ひとまず、人に見せられるような恰好にしないと外出もできない。

服屋に服を買いに行く服もないなんて事が本当に起ることは思わなかつたが。
そう思い、大手通販ストアの衣服ページを閲覧しようとスマホを取り出し、早く届いてくれると有難いな、なんて思った所で、ある重大な問題に気付く。

(……女性用の服や下着つて、どうやつて選べばいいんだ……!?)



あれからネットの記事や以前購入したアイドル雑誌を参考に、どういう服を着れば恥ずかしい思いをせず問題なく外に出れるかを調べた。

恥ずかしい思いをせず問題なく外に出れるかを調べあげた。

流石にいきなりひらひらの服やスカートを着るのは抵抗があつたので、あさひや咲耶が普段着ているようなボーライツシュなコーディネートを探し、気に入つたものをそのまま一式で購入するという荒技で乗り切る事にする。

気に入つたものをそのまま一式で購入するという荒技で乗り切る事にする。
サイズが合うかどうかは心配だが、ひとまずは外に出られるようにする為の服としてどうしても必要なので、迷つてはいられない。

そうこうしているうちに、いつも家を出る時間を過ぎてしまっていた。

事務所には本当の事を言おうか迷つたが、ちゃんと言いたい事を用意してからにした方が良いだろうと判断し、差し当たつては、

『体調不良により、休暇を頂きます。突然の連絡で申し訳ありません。

状態が落ち着き次第、改めて連絡をさせて頂きます』
とメールを送信してお茶を濁す事にした。

嘘を付いて仕事を休むなんて事と今まで無縁の人間だったので、罪悪感に心が痛んだが、突然本当の事を言つても混乱させるだろうし……と理由を付け自分無理やりを納得させる。

幸いにも、今まで真面目に仕事をこなしてきたからか、

『了解した。今日の事務は私とはづきでやっておくから、お前はゆつくり休め』

『プロデューサーさんはそろそろ有給を消化して欲しいと思っていたんですよ。』

ですから今日は安静にしていてくださいね、部屋で仕事しちゃ駄目ですよ』

なんて、社長とはづきさんから暖かい返信が帰ってきたものだから、今更ながら自分はなんて良い職場で働けてるんだろう……と感慨深くなつた。

設立当初からずつとこの三人でやつてきて、マンパワーの足りなさに悩んだこともあつたけど、様々な困難を乗り越えて今では一人とも家族のような存在だ。

もし彼らに今の自分を受け入れて貰えたなら、それがどれだけ救いになるだろうか

……。

なんて考えた所で連絡しないといけない相手が他にもいることを思い出す。

(確か今日はイルミネのレッスン日だつたな。俺がいなくとも問題ないとは思うけど、ちゃんと連絡しておかないと混乱させてしまう、よな……)

(ちゃんと連絡しておかないと混乱させてしまう、よな……)

少し迷つたが、やはり彼女達にも本当の事はまだ言わずに先程と同様、お茶を濁す事にした。

「イルミネのチエイングループ」

『みんなおはよう、朝早くに突然ごめんな』

『情けない事に体調を崩してしまつて今日はお休みを頂くことになつたんだ。レッスン

を見に行けなくなつてしまつて本当に申し訳ない』

『何か問題があつたらはづきさんに言えば対応してくれるとと思うけど、緊急だつたらこつちに連絡してくれても全然大丈夫だからな』

(まあ、こんな所か)

職場の仲間だけでなく担当のアイドルにまで嘘を付くことになつてしまつた事は心苦しいが、今は我慢するしかない。

『プロデューサーが体調を崩すなんて、珍しいですね。今日くらいはゆっくり休んで、ちゃんと栄養の付くものを食べてください』

文章を送信してすぐに、灯織からの返信があつた。少し棘のあるような言い方だが、灯織なりに心配して送つてくれたのだろう。

『わかりました。プロデューサーさん、私達の事は気にしないで大丈夫ですから、灯織ちゃんの言う通り今日はゆっくり休んでくださいね』

続けて真乃から返信と一緒にコミカルな鳩のスタンプが送られてきた。

真乃是チエインでも真乃つて感じで、独特な雰囲気だから心が癒される。

『えっ!』

『プロデューサー大丈夫!?』

『お見舞いとか行つた方がいいかな?!?!?』

『心配だよ～!!』

少し遅れて、怒涛の勢いでめぐるからの返信が送信されてきた。

今更ながら、チエインの文章一つにも性格が出ていて面白く感じる。

『めぐるちゃん、落ち着いて。プロデューサーさんが困っちゃうかも』

『あ！』

『プロデューサー、騒がしくしてごめんなさい』

『いや、心配してくれてるのが伝わってきて嬉しかったぞ、ありがとな』

『それと、動けない程重症って程でもないからお見舞いはなしで大丈夫だ』

『そうなんだ、うん、わかった！プロデューサー、お大事に！』

『疲れている時に摂取すると良い食材のリストを後で送りますから、良かつたら参考にしてくれると嬉しいです。お大事に』

『プロデューサーさんの分までレツスン頑張っちゃいますね。どうかお大事にしてください』

(みんな……暖かいな、俺の周りにはいい人ばかりだつてことを実感するよ)

どこまでも真っ直ぐでひた向きな担当アイドル達の言葉に心を洗われるが、同時に、そんな彼女らに嘘を付かなければならぬことへの罪悪感も大きくなつていった。

誤魔化せるのは少なく見積もつてあと二、三日か。一週間はもたないだろう。

今まで盆や元旦でさえ長期休暇を碌に取つてこなかつたのに、体調不良なんかで急に何日も休もうものなら理由を問い合わせられるか、或いは家まで押しかけられかねない。だから、そうなる前に現状を説明して信じて貰える準備をしなければならない。

しなければならないのだが……：

(腹、減つたなあ……)

チラリと壁時計を見やると、短針がもう少しで11時を指そうかといった頃合いだつた。

昼時には少し早いが、朝食を取らなかつた事もあり、先程から微かに感じていた空腹感がいよいよ無視できないレベルにまで達し始めている。

ひとまず何か食べて腹ごしらえでもしようか……。

そう思つて腰かけていたベッドから立ち上がり、キッチンの物色を始める。
目当てのものはすぐに見つかつた。

(今頃みんな何してるかな……)

湯を注いで蓋をした今日の昼飯をぼんやりと見つめながら、今日会う筈だつた283
プロダクションの皆の顔を思い浮かべる。

(一人暮らしをする女の昼飯がカツラーメンつてのも酷い絵面だよな。今度灯織か恋鐘にでも料理を教わろうかな……)

ある種の現実逃避だろう、そんなくだらない事を考え始める。

ふと視線を窓に移すと、物憂げな表情をしている女性の顔が映つていた。

この姿を自分だと認識できるようになるまでは、まだ時間が掛かりそうだ——

第二話

「……」れはいらない。これは……まあいいか、これも必要ないな。」

いかにも一人暮らしの独身男性が住んでいますと言つた雰囲気の部屋で、そこに住むには全く似つかわしくないが雰囲気の女の子が掃除を行つてゐる。しかし実際の所、それは掃除というよりはむしろ断捨離に近かつた。

目に付いたもので必要ないと判断したものを片つ端から袋に詰めて、いつでも捨てられるようにする。それはまるで、”そこにかつて住んでいた誰か”的痕跡を消し去ろうとしているかのようにも見える。

「よし、ひとまずこんなものでいいか」

(自分の口から自分ではない声がするこの感覚、未だに慣れないな……)

ひとまずの腹ごしらえを終えてまず初めに彼女が取り掛かったのは『過去の自分との決別』だった。未だに信じられないが実際に性転換してしまつた

以上、以前の自分とは異なつた生活をしなければならない。これはその下準備である。

思つたより作業に熱中していた為か、時刻は既に昼の3時を回つていた。

いつもなら事務所でのデスクワークを一旦切り上げて休憩がてらにレッスン室の様子を見に行く時間だ。些細な事だが、こういう細かいコミュニケーションの積み重ねでアイドル達との絆を深めていったので、一日でもそれが達成できない事に対し僅かに焦燥を覚える。

(イルミネの事だからレッスン 자체はつつがなく進行するとは思うが……
やつぱり寂しいな……。)

元々人と話すのが好きな性格故に一人で過ごすのはあまり好きではなかつたが
この姿になつてからどうも酷く寂しがり屋になつてしまつたようだ。

なんと女らしいことか、そういうやつたな、などと心の中で自問自答をしながら
ベッドの上で自分の枕を抱きしめて横になり、寂しさを紛らわす。そうしている内に
だんだんと安心感を覚え始めた彼女は、やがてすやすやと可愛らしい寝息をたて始め

た



「「ワン・ツー・スリー・フォー！」」

静謐なレッスン室に声質は不揃いだがタイミングはピッタリ揃つた三種の声が木靈する。

激しい振付で三人お揃いのジャージを汗みどろにしながらも、例え鏡の前であろうと笑顔を

絶やさずにダンスをこなしていくその姿は、まさに理想のアイドル像そのものだ。
283プロダクションには個性豊かなアイドルとそのユニットが多数在籍している
が、その中でも

櫻木真乃、風野灯織、八宮めぐるの三人で構成される『イルミネーション・スターズ』
は最も笑顔が似合うユニットだと称されており、実際に今この場で三人のレッスン風
景を

目の当たりにすればそれを疑う者はいないだろう。

やがて、備え付けのスピーカーで流している彼女達の持ち歌も終盤を迎へ、最後の振
付を終えた所

で曲も自動的にストップする。三人共息は多少上がっているが、まさにやりきった、と言わん

ばかりのその表情は、さながらライブステージの上に立っているかのように見える。だがそうしていたのも束の間、”アイドル”から”普通の女子高生”に戻つた三人は誰かが合図した訳でもなく、同時にへなへなと脱力。床に腰を落として息を整え始めた。

「ふう……真乃、めぐる、お疲れ様。二人も私もかなり汗も搔いてるし、そろそろ休憩にしよう」

三人の中で一足先に息を整えた黒髪の少女、風野灯織が声を上げた。
イルミネで一番小柄で年少者の彼女であるが、こうしたレッスンや仕事の時は率先してスケジュールの管理を担当する事が多い。その姿がまるでお母さんみたいだね、と

担当のプロデューサーや283プロに所属するアイドル達に言われているが本人の前で言うと顔を赤らめて怒ってしまうので心の中に留めておくべきだろう。

「はあ、はあ……、うん、そうだねつ、私も疲れちゃつたし……灯織ちゃんに賛成」「わたしも！すづく喉乾いちやつたから灯織にさんせーい！」

そんな彼女の言葉を受けるのは、イルミネのほんわか担当櫻木真乃と元気担当八宮めぐるだ。

汗でじつとりと濡れた額を一方は首に掛けたタオルで、もう一方はジャージの袖で拭いながら返答

をする。互いに向かいあつて座りながら水分を補給する三人の少女達だつたが、やがて先程まで

取り組んでいたステップ練習の感想を思い思ひに語り始めた。

「んく、んく……ふは～っ！」この曲、最後のステップが難しすぎるよ～！」

スポーツドリンクを勢いよく飲み干しながらひとりごちるようめぐるが叫ぶ。
三人の中で運動神経が一番良い彼女でさえついぽやいてしまう程には
アイドルとしてのイルミネが世間に要求されるレベルは高まりつつある。

「ふふつ、めぐるちゃんがそんな風に言うなんて、なんだか新鮮な感じだねつ」

「確かにそうかも、『今之所楽しかったからもう一回踊りたいな！』なんて言つてくるかと思つたのに」

「ちよつと二人とも？ 私だつて疲れるときくらいあるよつ！」

「でも、そう言う割にはまだまだ元気そうに見えるけど？」

「えへへっ、灯織にはお見通しか！」

ユニット結成当初は会話一つでギクシャクとしていた彼女達だが今となつてはこんな風に

軽口を叩き合える程には仲良しになつていて。尤も、夜空に輝く星座イルミネーション・スターズを形作る星々はいつもに一緒にいる事が当たり前なのだが。

「ほわあ～、やつぱりめぐるちゃんは凄いね……。私も負けてられないや」

「私も……それなりにスタミナは付いてきたと思つていたけど、今回の曲を完璧に踊り切る

にはもつと体力トレーニングを頑張らなきや」

「あつ！ でもでもつ、さつきの通しは今まで一番タイミング合つてたと思うよ！」

「うん、私もそう思う。特に真乃、先週に比べて見違える程動きが良くなつてた」

「わあ……ふふつ、ありがとう灯織ちゃん。灯織ちゃんも、中盤で崩れかけた時にしつか

り

リードしてくれて、すつごく頼もしかったよっ」

複数人での自主レッスンは互いが互いの悪い所を指摘しあつて個々の動きを改善させていく

という流れが一般的だが、この三人に關してはむしろお互いの良かつた所を褒めあつてモチベーションを高めあう事の方が多かつた。

自分のダンスの悪い所くらいはちゃんと自分で気付けるくらいには、彼女達も伊達に場数を踏んではいないので所謂『褒めちぎる戦法』の方が効率的に上達出来るという訳だ。

「上手くいった所、プロデューサーにも見て貰いたかったんだけどな……」

「め、めぐるちゃん……」

めぐるの何気ない一言で、先程までの和やかな空気に暗雲が立ち込める。イルミネは当初より

三人ユニットとして活動を行つてきたが、その精神的支柱として、レッスンの時や仕事の時も、

常に傍でサポートを行つてきたプロデューサーを含めると実質的には四人のユニットと言える。

勿論、今日の自主レッスンにも途中から様子を見に来てもらう予定だつた。そんな彼

が不在

とあつては、さしもの彼女らにも、決して小さくない影響があつた。
「プロデューサー、ここ最近忙しそうだつたし、体調を崩してしまつたのも仕方がないと思
う……」

それにめぐる、元々今日は私達だけで自主レッスンする予定だつたでしょ」
「確かにそうだけど、……でもプロデューサーがいないと寂しいよー！ 灯織もそう思
わない？」

「もう、私だつて寂しくないとは一言も言つてないでしょ……。」

「……。」

二人の会話を聞いて、先程までほわスマイルを浮かべていた真乃も暗い顔で押し黙つ
てしまつた。

しかしその表情は、二人とは少し違う事を考えているようにも見える。

「……？ 真乃、どうかした？」

「ほわつ、えつと、その……私もプロデューサーさんがいなくて寂しいのは同じなんだけ

ど

どつちかつて言うと、寂しいよりも心配だなつて思う気持ちの方が強くつて……」
「……わかるなあ、その気持ち、わたしも踊つてる最中に

『プロデューサー大丈夫かな～……』ってついつい考えちゃったもん

「ふふっ、チエインではめぐるが一番プロデューサーの事心配してたもんね」

「そ、それは言わないでよ～……！」

今朝のチエイングループでのめぐるの連投を思い出し、皆で笑い合う。

あんなに早いフリック入力見たことない、あの時は一発で目が覚めたよ、なんて他愛もない話で

再び会話が盛り上がり始めた所で、灯織はある事に気が付いた。

「……つていうか、今思つたんだけど、プロデューサーが体調不良で
お仕事を休むなんて、もしかして今日が初めてなんじや……」

「確かに、言われてみれば初めてかも！」

「真乃はどう思う？」

「え、えっと、レッスンの日に私達は何回か休んだ事があるけど、プロデューサーさん
がお仕事以外で休んだ事は一回もなかつたかな？」

「やっぱりそうなんだ……」

それもその筈、彼女らの担当プロデューサーは仕事の為に生きていると言つても過言
ではない

根からのワーカーホリック人間であり、冠婚葬祭等やむを得ない事情以外で仕事を休んだ試し

がない。283プロ所属アイドルからもその振る舞いを揶揄して『ミスター・オールドタイプ』

などと称されたこともあるが、とにかくそんな彼が休暇を取らざるを得ない程体調が悪化して

いるのだ、自分達の想像以上に今の彼は衰弱しているのかもしれない、という考えに至つた。

「私、一応プロデューサーに電話を掛けてみようと思う。二人はもう少し休んでて」

「うん……私もそうした方がいいかなって。灯織ちゃん、お願ひするね」

レッスン室の隅に置いてあるカバンの中からスマートフォンを取り出し、着信履歴の中から

家族や友人と同じ回数ほどには通話履歴の残るその番号を探し出し、一瞬迷う。

急に電話を掛けて迷惑にならないだろうか……物事を悪い風に考えてしまうのが彼女の癖だつた。

しかし、そもそも言つてはいられない。灯織は意を決してプロデューサーへコールをする。

「あつ灯織！そういうことならスピーカーにして！わたしもプロデューサーの声聞きたい！」

「はいはい、繋がつたらね……」

「気のない返事をしながら、スマートフォンを耳に当てて耳を澄ました。

トゥルルル、トゥルルル、と機械的なダイヤル音が繰り返される。実の所、灯織は電話という

コミュニケーションツールがあまり好きではなかつた。いつ相手が出るかわからな
い緊張感や

お互の顔が見えない故に表情から感情の機微を汲み取る事ができない所が、小心者の

彼女にとつては耐え難いものに感じるのだ。勿論、ユニットのメンバーやプロデューサー相手

ならば例外だが。

トゥルルル、トゥルルル、トゥルルル、トゥル、ガチャ

永遠のように続くかと思われたコールがようやく終わりを告げる、しかし

「……あつ、もしもししプロ——」

『お掛けになつた電話番号は、現在電話に出ることができません。ピーツという音の後

「えつ……なんで……？」
に
』

返ってきたのは、無情にも鳴り響く機械音声だつた。



「…………んう…………むにや…………」

に
か

本日三度目になる起床を果たす。どうやら部屋の整頓を終わらせた疲れか、いつの間

寝てしまつていたようだ。少しほんやりとするが、布団を引っ張りながら腰を上げ、
軽く伸びでもした所、次第に頭が冴えてきた。この感じなら、どうやらそこまで長時
間

昼寝をしてしまった訳でもなさそうだ。時刻を確認しようと、いつの間にかズボンのポケットに入っていたスマホを取り出して電源を入れる。すると目に映つたのは17：03という大きな時刻表示とその下にある『不在着信：3件』というメッセージだつた。

(……!?しまつた、電話を取り逃してしまつたのか！しかも3件も……！やばい……！) 急いで電話アプリを立ち上げて履歴を確認する、そこには上から順に、

『櫻木真乃 16：02、八宮めぐる 15：27、風野灯織 15：04』と表示されていた。今日がレッスン日のイルミネのメンバーから立て続けに着信があつたという事実に、

背筋が

ぞくりと震え、嫌な予感を覚える、もしかして何か大変な事があつたのか……!?

そう考えた所で、一旦ホーム画面に戻るとチエインのアプリアイコンの右上に赤い数字

が重なつている事に気付く。電話が繋がらないと判断したのか、こちらでメッセージを

送つてくれたのかもしれない。恐る恐るアプリを開いて、通知内容を確認する。

（風野灯織とのトーク画面）

16：05 『プロデューサー、起きてらっしゃいますか』

16：05 『電話が繋がらなかつたので、こつちでメッセージを送ります』

16：05 『今までプロデューサーが体調不良で休む事なんてなかつたので
真乃もめぐるも、私も心配しています。プロデューサー、本当に

お体の調子は大丈夫なんですか？』

16：06 『本当に大丈夫なら良いんです。ですが、ちょっとでも一人でいるのが

辛いって思つたら、迷わず私達を頼りにしてください』

16：06 『私達、今まで何度もプロデューサーに助けて貰いました

もしプロデューサーが困つているのなら力になりたいんです』

16：07 『お返事、待つてます』

不器用な彼女なりに言葉を選んだのだろう、こちらを気づかいながらも心配して
くれているのが良く伝わってくる、灯織にしては珍しい長文のメッセージが届いていた。

「……え、これ……もしかして、俺を心配してくれたのか……？」

確かに、一人暮らしの人間が急に体調を崩すと色々不都合は生じるし、心配になるの

もわかる。

だが、自分は少なくとも社会人としてそれなりの年月を過ごしてきた大人なのだから体調管理は自己責任、それに失敗したなら責められることはあれど心配されるような資格はどこにもないと考えていた。

見た所、めぐるや真乃からはメツセージは送られてきていない。

同時にたくさん送られてくると混乱させてしまうと判断したのか、灯織が代表してくれたようだ。

とどのつまり、自分は皆に心配させまいと気丈に振る舞つたのだが、それが逆効果だつたらしい。

(……俺は馬鹿だ、本当に……)

(人が困っていたら迷わず手を差し伸べるのに、自分が困っている時に差し伸べられる手は振り払ってきたなんて――)

今まで自分がしてきた愚かな行動にようやく気が付いた、自分はなんて身勝手な行いをしていたの

だろう、と自己嫌悪に陥りりそうなる。

もしかしたら、この姿になつたのも愚かな自分に神様が与えた天罰なのかもしれない

……

いや、そんな事を考えている場合じやない、ひとまず灯織に返事をしなくては。確かに彼女達の力を今借りられたら非常に心強いのは間違いないが、それでもいきなり事情を打ち明ける勇気はまだ持てそうになかった。

『灯織、何度も電話やメッセをくれたのに反応できなくて、本当にごめん』

『真乃やめぐるにも心配かけちやつて申し訳ないと思つて、後で自分から伝えておくよ』

『でも、体調に関しては本当に大丈夫だから安心してくれ。電話に出れなかつたのも
メッセに返事が出来なかつたのも、丁度その時ぐつすり眠つてたからなんだ』

『それと、今日のレッスンの事だけど、もしよかつたらどこまで進んだか――

そこまで文字を入力した所で、スマホの画面が急に切り替わり着信音が鳴り響いた。
着信名は『風野灯織』と表示されている。

（灯織……っ!? レスピオンス早すぎるだろ：つ！ つていうか今電話に出るのは色々とやば
い！）

いきなりの事に焦りながらも、流石に自分の電話番号から見ず知らずの女の声が聞こ
えてきたら

灯織も混乱するだろうし、最悪の場合あらぬ誤解を招きかねない。

ここは心を鬼にして、着信拒否の方向へダイヤルをスライドする。

『灯織、電話拒否してすまない。大丈夫だとは言つたけど、実は喉の調子がまだ治つてないんだ。

できればこつちで会話してくれると助かる』

我ながら、最低な事をしているとは思う。灯織にはまたいつかこのお詫びをたつぱりとしよう。

今はこれで納得してくれ……！

『やつぱり、そうだつたんですね』

(……え?)

『いつもならこういう大事なことは電話で伝えてくれるじゃないですか

それなのに今日は全然使わなかつたですよね』

『妙だな、つて思つてたんです。その様子だと予感は的中したみたいですね』

……自分が深刻な状況にある事はどうやら、彼女達には全て筒抜けだつたようだ

その上で今まで試されていたらしい。掌の上で転がされるとまさにこの事だ。

それでも、女になつてしまつたなんては流石に想像していないだろうが……。

『ですから』

『プロデューサーは玄関の鍵だけ開けておいて、布団でゆっくり休んでいてください』
……は？

『え、それは一体、どういう』

『はづきさんから住所を教えて貰いました、今からそちらへ看病へ向かいます

真乃とめぐるも一緒に、ですかね』

一気に血の気が引いて顔が真っ青になるのを感じる。

今から、この部屋に灯織達が、来る……？それってつまり……

”この姿でここにいるのを見られてしまう！”

『ちょっと待つてくれ灯織！アイドルにそんなことさせられない！俺は大丈夫だから
二人にも申し訳ないけど今日の所は真っ直ぐ家に帰つて貰えないか』

『もう、まだそんな事言つてるんですか、本当に気にしなくてもいいんですよ』

『それに』

外から複数人の足音が近づいてくるのが聞こえる。

『ごめんなさい、もう着いちゃいました』

（嘘だろ……！？）

彼女達なら理屈で説得すれば引いてくれると思って、完全に油断していた。イルミネ

は三人揃つたら

やると決めた事は絶対やり遂げようとするユニットだという事を完全に忘れていた。

こうなつてしまえばもう逃げ場はない、完全に袋のネズミだ……。

なんとか思考を整理しようと頭をフル回転させているのを急かすかのように
ピンポーン、という音が部屋中に響き渡つた。

(インターほんが鳴つたつてことはもう玄関の目の前じやないか!)

もうこうなつたら最終手段を取るしかない、居留守を決めよう!

夜食の買い出しにコンビニに出掛けてるつて事にして、一旦帰つてもらえば——
がちやり、という音がした。

『か、勝手に入っちゃつて大丈夫かな…?』『不法侵入ストレスレだけど、こうでもしない
とプロデューサー入れてくれないだろうし…』『プロデューサーさん、ごめんなさいつ
……』

そんな話し声が聞こえてくる。

(鍵掛けるの忘れてたあ―――!!!!)

「プロデューサー、勝手に入つてごめんなさい……お身体の方は大丈

「ま、待つてくれ!!」



「「「……え?」」

私達三人は体調が思つたより深刻そうだつたプロデューサーの看病をする為にはづきさんに何度も頭を下げて教えてもらつた住所の家に入つていた。

真乃にはドラッグストアで購入した医薬品類を、めぐるにはスーパーで購入した食材の入つたレジ袋を持つてもらい、三人で隙のない万全な看病体制を整えてプロデューサーに早く元気になつてもらう、完璧な作戦を立ててきた、はずだつた。しかしどうだろうか、異様なほどに物が片付いたその部屋の中にいたのは

長身で短髪の、私達がすっかり見慣れた男性の姿ではなく。

両手でスマホを抱えてぺたん、と床に座り込み、今にも泣きそうな表情をしている

”女の子”の姿だった。

第三話

私達人間は日常生活において、しばしば予想もしなかつた想定外の事象に遭遇することがある、が、基本的にはそれらの事象に対し、即座に過去の経験などから判断して何かしらの対処ができるようになつてゐる。自然界において、未知との遭遇に際し長時間同じ場所に留まり続けるのは自殺行為に等しいからだ。

しかし、その想定外の事態があまりにも”想定外過ぎた”場合――
具体的に言えば朝起きたら海の上に居た、だと、空を眺めていたら隕石が落ちてきた、だとか

あるいは一人暮らしの成人男性の部屋に入つた筈なのに、大学生くらいの女性に出迎えられた場合、などの今までに全く経験した事のない類の想定外に遭遇した場合、思考がオーバーフローするのを防ぐ為に、脳が無意識に考えるのをストップさせるという。

そして、現在都内某所にある賃貸アパートの一室にてお互に見つめ合う三人の少女と一人の女性も同じような状況にあつた。



(ど、どうしよう……！部屋を間違えちゃつた？ でも真乃とめぐると一緒に確認して、この部屋の番号で間違いないって……！)

アイドルとしてそれなりの経験を積んできた今の自分でさえパニックに陥ってしまふほどには、私、風野灯織は過去一番のレベルで焦っていた。なにせ、プロデューサーの部屋に入つた筈なのに全く知らない女性が居たのだ。後ろから付いてきた真乃とめぐるも驚愕の表情を浮かべて固まっている。しかしそれは相手も同じだつたようで、私達三人を交互に見渡しては口をパクパクと動かしている。

(この人が誰かはわからないけれど、とりあえず謝らないと……！)

人間、焦つてる時に他の人が焦つているのを見ると却つて冷静になるもので、先程まで完全に思考がフリーズしていた自分も徐々に落ち着きを取り戻してきた。

「あの……驚かせてしまつてごめんなさい！」

ほぼ直角に近い角度でビシッとお辞儀を決めながら謝辞の言葉を述べた。未だに状況はうまく飲み込めないが、両者が混乱する原因を作つてしまつたのはどう考えても自

分達にあるのは疑いようもなかつた。私と同じように放心していた真乃とめぐるもはつとした様子で我に返り、言葉を続ける。

「ごめんなさい、いきなり入つてきて信じて貰えるかわからないんですけど、そのつ」

「わくつ！え、えくつと、わたし達、このアパートの△号室に住んでいる○○さんが体調を崩して休んでるつて聞いてお見舞いに来たの！イルミネつて言えば伝わるかな？あつ、イルミネつて言うのは○○さんがプロデュースしてるアイドルユニットの事で……」

「めぐる、一旦落ち着いて。すみません、私達、もしかしたら部屋番号を間違えてしまつたかもしないので、一旦外に出て確認してきます。二人とも、早く出よう」

「う、うんつ、そうだね、本当に失礼しました……」

「お姉さん、お騒がせしてごめんなさい！……つて灯織くく置いてかないでよくよく！」

ひとまず、他人の部屋で知らない人間と一緒にいるという状況から一刻も早く脱する為に適当な理由を付けて玄関から飛び出した。実際の所、入る前に部屋番号は何回も合っている事を確認したし、律儀なプロデューサーらしくちゃんと表札も出していたの

で、間違えて他の人の部屋に入つてしまつたという可能性は限りなく低いのだが、肝心な時に限つてこの三人組は根が小心者であるのを隠せなかつたという事だろう。

「えつ……？ ちよつ、待つ……」

ドタバタと玄関に舞い戻る私達の背中に引き止めるような声が掛けられるが、退却を優先する為にあえて耳を傾けない。玄関先にて先程揃えた三人分の靴を見るや、ちゃんと履く時間さえ惜しんでとにかく足を靴の中に放り込み、扉を開けて外の空気に再び触れる。

「び、びつくりしたあゝ……」

ガチャリ、と少々荒っぽく扉を閉じ終えためぐるが胸を撫で下ろしながら言葉を漏らす。

「うん……流石にこれは想定外だつた……」

同じように一息付きながら言葉を返しつつ、ちらりと目の前にある部屋の番号と表札の名前を確認する。すると、やはり、そこには事前に何度も確認した番号がそつくりそのまま記載されている。いつその事、間違えてくれていたら良かつたのに……

「……でも、部屋番号と表札的にここがプロデューサーの部屋で間違いない筈なんだけど」

「それじゃあさつきの人はプロデューサーさんのご家族の方かな……？」

「うーん、プロデューサーは一人暮らしだし、実家もここからかなり遠いって言つてたからどうなんだろう……」

腕を組んで扉と睨めっこしながら、先程の女性の素性について考察する。正直、プロデューサーが体調を崩したのは今朝の事なのに、それを聞いてすぐここまで来るとはいくら家族でも考えにくいし、そもそもあの人は家族にそんな連絡はしないだろう、と結論付ける。朧気に思い出せる顔立ちはプロデューサーに雰囲気が似ていたような気もするが……

「えっと、ひよつとしたら、だけど……プロデューサーの彼女さん、とか？」

「…………あく…………」

めぐるに言われて、今まで無意識に脳内から除外していたその可能性を否応なしに考えさせられる。確かにあの人、仕事先で若い女性A Dさんやスタイルリストさんに食事の誘いを受けたりしてゐるし、なんなら283プロダクションの中にも少なからずそういう目で彼の事を見ているアイドルが存在するのも事実だ。

「やつぱりそういうことなのかも……プロデューサーも一応業界人だし、公表してないってだけでお付き合いしてゐる人がいてもおかしくないから」

「ほわつ、もしかして私達、来ちゃいけない時に来ちゃつたのかな……」

「…………とりあえず今日は一旦帰ろう、プロデューサーには後日改めて謝罪を――」

そう言いかけた所でガチャリ、とドアノブが捻られる音がした。ぎよつとして振り返ると、玄関の扉が少しだけ開かれており、その隙間から先程の女性がこちらの顔色を伺うように顔を覗かせていく。

「お、おい……」

「ひつ！す、すみませんっ！こんな所で話してたら迷惑ですよね、すぐ帰りますから」

「ああいや、そうじゃなくつて……」

女性は一度言葉を切り、少しだけ開けていた扉を全開にして言葉を続ける。

……とりあえず、詳しい話は部屋の中でしょう。」
「だと近所迷惑になるから、な？」

ドアストッパーを降ろし、私達を受け入れる姿勢を万全に取つて出迎える。

は、
はい、
わかりました……」

震えるようにそう呟きながら、困惑した表情の真乃とめぐるを連れてさつき飛び出したばかりの部屋へもう一度上がる。こうなつたら、もう何を言われても謝ろうとだけ考えていた。



「さて、と……」

蜂の巣でもつづいたかのように混乱の様相を見せていたイルミネの三人を、なんとか落ち着かせて部屋に上げた俺は、これから何を言つたものか、と脳をフル回転させて考えていた。ふと、先程からフローリングの上に座っている彼女達を見ると、所在なさげにしながらこちらが何か言うのを待つているようだつた。

正直、この場で適當な嘘をでつち上げて誤魔化すのは簡単な話だ。玄関越しに聞こえてきた会話から察するに、今の俺の事を以前の俺の家族か恋人だと勘違いしているようだし、そういう事にして強引にこの場を乗り切るという手段も選択肢としては十分考えられる。

しかし、長期的に考えれば得策ではないし、むしろ誤解を与えてしまつてはいる現状の方が彼女達にも良くない影響を与えてしまうかもしれない。それに改めて、真乃、灯織、めぐるの座っている方へ目を向ける。やや不安気な表情を浮か

べてはいるものの、その視線がブレることなく真っ直ぐに俺の方へ向けられていた。こうなるに至る経緯にすれ違いがあつたとは言え、三人は俺の事を心配してここまで来てくれたのだ。その真っ直ぐな想いに応えるのに誠実でなかつたら嘘ではないか

「とりあえず、先に誤解を解いておくと、私は……君達三人を担当しているプロデューサーの家族や恋人ではないんだ、まずそれをわかつて欲しい。」

「あ……、そうだつたんですね。すみません、私達、変な誤解を……」

「いや、そう思うのも無理はないから謝らなくていいんだ、灯織は決して悪くない」「は、はい、ありがとうございます…………えつ、なんで私の名前知つて……？」

「うん、まあそういう反応になるよなあ……」

これは参つた、と頭を搔きながらも、すぐ姿勢を直し、覚悟を決めて言葉を続ける。
「单刀直入に結果だけ言う。信じて貰えるかわからないが、今から言うのは全て本当の事だ。」

三人の喉がゴクッと鳴つた。

「私は……いや、俺は、記憶上では君達の担当プロデューサーの○○という人物と相違ない。それが、朝起きたらこんな姿になつていて……信じがたい事に、どうやら女性の身体になつてしまつたようなんだ」

精いっぱい言葉を振り絞つてついに秘密を打ち明ける。案の定、三人共こちらの言つ

ている事をうまく理解できなかつたようで、ぽかんとした表情を浮かべている。やつぱり信じて貰えないよなあ……と半ば諦めかけていた所、灯織に続けて真乃が声を上げる。

「…………え？ 女性の身体になつた、つて……一体どういうことですか…………？」

「それが俺にもわからない……突拍子もない事を言つてるのはわかっているけど、本当の事だからそう表現するしかないんだ……」

「えつと、急にそんな事言われても、にわかには信じられないんですけど……」

灯織が困惑の表情をより強めながら言い放つた。

「そつ、そうだよな、そりやあ信じられないよな……でも本当の事だからなあ……ううん、どうやつたら信じて貰えるだろうか」

この三人ならあわよくば、と思つたが、やはり口頭だけで信じてもらうのは無理そうだ。となると、俺が彼女達のプロデューサーである事の証拠を突き付けるなりして証明する必要があるが……実際問題はそれをするのは悪魔の証明と同じくらい不可能に近い。

「うーん、よくわかんないんだけど……」

どうしたものかと考え直していた所、先程まで口を閉ざしていためぐるが意を決したように声を上げた。

「プロデューサー、朝起きたら女の子になっちゃつたって事だよね？」

「そ、そうだな、端的に言えばそういう事になる……」

「でも、チエインでは体調を崩したつて言つて言つてなかつた？」

「ああ、その事が、それはだな……」

唐突にめぐるの質問連打に困惑しつつも、もしかしたら信じて貰えているのかもしない、と淡い希望を抱きながら回答する。

「——てな訳でな、急に女性の身体になつた、なんて言つても頭がおかしくなつたのかつて思われそうだつたから、体調を崩したつていう嘘を付いて誤魔化したんだ。」

自嘲するようため息を吐きながら答える。やむを得ない事情があつたにしろ、彼女達に嘘を付いて信頼を裏切つてしまつた事は事実なので、そこに関しては深く負い目を感じていた。

「あの時はそうするしかなかつたとはい、嘘を付いてしまつた事に関しては本当に申し訳ないことをしたと思つていてる。真乃、灯織、めぐる、本当にすまない……」

深く頭を下げて謝意を表明する。まだ完全に信じて貰えてはいないにせよ、彼女達には先に謝りたいと思つていたので、その気持ちを優先する形となつた。

「ん、つてことは……プロデューサーは別に体調を崩してない、つて事で良いんだよね

?

「そうだな、こんな姿になつてはしまつたが…今の所体調には全く問題ないよ」

「そうだつたんだ……」

めぐるが噛み締めるようにそう呟き、言葉を続ける。

「……えへへつ、プロデューサーが元気そうで良かつたよ～！」

てつきり怒らせてしまつたのかと思つていたが、破顔しためぐるが予想と反する言葉を返してきた。

「えつ……それだけか？怒つてるとかではなく？」

「そんなことないよ～！……確かに、レッスンで見て欲しい所があつたから、それを見て貰えなかつたのはちょっと残念だつたけど……」

めぐるが一呼吸置き、代わりに真乃が言葉を続ける。

「私達、レッスン中ずっと心配してたんですけど、プロデューサーさんがお休みする程体調を崩してたなんてなかつたですから、大丈夫かな～って。ねつ、灯織ちゃんつ」「うつ、確かにそれはそうだけど……」

真乃のバスを受けて、灯織が何やら恥ずかしそうな表情を浮かべる。

「うんうん！特にプロデューサーに電話が繋がらなかつた時の灯織、すつごく焦つてたもんね～！」

「ちよつ、ちよつとめぐる……！そういう事は言わないでいいの……！」

ニヤニヤしながら茶化すめぐるに対し顔を赤らめた灯織が抗議の声を上げる。さつきまでの緊張感がまるで嘘だつたかのように、いつものイルミネの空気感が戻ってきたのを感じ、思わず笑みが零れる。

「……ははっ、そうか……三人共、そんなに心配してくれてたのか……」

数刻前に灯織が送つてくれたチエインのメッセージを思い出す。あの時の内容に嘘偽りは全くなかつたようだ。その事を再認識しただけなのに、涙が零れ落ちそうになる程胸が熱くなるのを感じた。だが、まだ安心するには早い、まだ俺がプロデューサーであると完全に信じてもらえた訳ではないのだ。

「……というかさらつと流したけど、めぐるはさつきの話を疑つたりしてないのか？」

「ん？ どうして？」

「いやあ、自分で言うのもなんだが……到底信じられないような話だろ？」

「あ～そういうことか～……」

少し感傷的な表情を浮かべためぐるだつたが、次の瞬間にはニコリと微笑んだ。

「えつとね、わたし、こう見えて人の雰囲気つて言うか、機微？を読み取るのが昔から得意なの」

自分の瞳をジッと見つめながら、めぐるが言葉を続ける。笑顔を浮かべているよう

で、何かをを思ひ出しているような、物憂げな表情だつた。

「それでね、今のプロデューサーの事、最初は見た時は違う人だと思つてたんだけど……」

「プロデューサーが私達の方を向いて喋り出した時、なんでかはわからないんだけど……直観的に『あつ、この人は私達のプロデューサーだ』つて思つたんだ。えへへ、言葉で説明すると難しいんだけどね……」

「……つ。めぐる……！」

つい感極まつた声が漏れる。ああ、少しでもめぐるの事を疑つていた先刻までの自分はなんて馬鹿だつたのだろう……：

「つて、わたしは思つてるんだけど、二人はどうかな？」

めぐるが横で座つてゐる二人の方を向き直す、その問いに、先に答えたのは真乃だつた。

「そうだね……私もめぐるちゃんと同意見かな。最初は違う人が出てきてびっくりしちやつたけど、お話ししてゐる内になんだか安心してきて……プロデューサーと話してゐる時と一緒だな、つて思つたの。」

めぐるがうんうん、と頷いた後、続けて灯織に視線を向ける。一瞬躊躇つていた灯織だつたが、やがて観念したかのように言葉を紡ぎ始めた。

「正直、今でも頭では信じられないけど……玄関には男性用の靴しかなかつたし……、何より」

「その、私の名前が呼ばれた時、全然違う人の声なのに、『プロデューサーに呼ばれた』って感じがしたんです、めぐると一緒で、言葉にするのは難しいんですけど……その」「信じられないけど、信じたいんです。今の貴方がプロデューサーだという事を」

「つ……、真乃……！、灯織……！」

なんて美しいものなんだろう。

理由はわからずとも、俺が俺であると信じてくれている。信じようとしてくれている。

たつたそれだけの事、だが今の自分にとつては、まるで全てが救われたような気持ちにさせられた。

自分の感情を抑制していたものがなくなり、顔をツツーと熱いものが流れていくのを感じる。

「うう……ぐすつ、ごめんなあ……三人共、心配掛けて……ひぐつ……」

「プロデューサー!?」

「おれ、俺つ、ぐつ、急にこんな姿になつて、何がなん、なんだかわかんなくつて、それで――」

溢れる涙を必死で堪えながら、必死に言葉を絞り出している不意に暖かいものに頭が包まれた。

「大丈夫だよ……プロデューサー」

耳元からめぐるの囁くような声が聞こえてくる。

「わたし達はどんな時でもプロデューサーの味方だからね……今は泣いても良いんだよ」

赤子をあやすような声色でゆっくりと諭される。

（そうか、俺は今、めぐるに抱きしめられているのか……）

抵抗しようと思えばできたが、する気になれなかつた。身体が華奢になつたのもあるが、それ以上に、小さい頃に母親に抱かれている時と同じ心地がして、離れたくない、と思つてしまつた。

（このまま、めぐるに身を委ねてしまうのもいいか……）

そんなことを思い始めたのも束の間、ぐうぐう、と自分のお腹が大きな音を立てた所で、自分が空腹感を感じている事によくやく気付いた。

慌ててめぐるから距離を取るも、なんだか恥ずかしくて目を俯けてしまう。「プロデューサー、もしかしてお腹、減つてる?」

「…………らしいな……、三人共、すまない、恥ずかしい所を見せた……」

「ほわつ、そんな、気にならないでください」

「そうですよ、プロデューサー、それに私達、そのつもりでここに来たんですから」

灯織がそう言つて立ち上ると、床に置いていたレジ袋を持ち上げて見せびらかして
きた。どうやら食材類が一式揃つているようだ。もしかして、これも俺の為に……？

「こんな事もあるうかと、多めに食材を買つてきたんです……プロデューサー何か食べ
たいものがあつたら遠慮なく言つてください。今からキツチンをお借りして私達で作
ります」

「えつ、そんな、申し訳ないよ。看病しに来てくれただけでも有難いのに、夕食まで御馳
走になるなんて……」

「……もう、さつきまでめぐるに赤ん坊みたいに甘えてた人が何言つてるんですか……」
「うつ、確かにそれはそうだが……」

痛い所を付かれて何も言い返せなくなる、つていうか赤子みたいって、俺そんな表情
してたのか……？

「ともかく、難しい話は後にして一旦晩御飯にしましよう。身体が資本、なんて言つてた
のはどこの誰だつたか、忘れたとは言わせませんから」

「わかつた、わかつたから……じゃあお言葉に甘えて、カレーを頂こうかな。」

「カレーですね、わかりました。冷蔵庫にあるものは使つても大丈夫ですか？」

「ああ、ルーも普段使つてるやつがまだ残つてゐるから、それを使つてくれ
 「ありがとうございます。それでは、キッチンお借りしますね」

そう言うと灯織は、カバンの中から普段使つてゐると思しきエプロンを手慣れた手つきで身に付け、キッチンの方へとスタスタと歩いて行つてしまつた

「私も灯織ちゃんのお手伝いをしてきますね、プロデューサーさんはここで待つてて
 ください」

「とびつきり美味しいの作つてくるからね～！」

真乃とめぐるも、灯織を追いかけていく。俺も付いて行こうかと思つたが……やめた、今は三人の好意を素直に受け取ることにしよう。

それに……

ふと、キッチンで楽しく談笑しながら食材の用意をする三人組にチラリと視線をやる。肉を切りながらテキパキと二人に指示を出す灯織、一生懸命野菜の皮を向く真乃、米をシャカシャカと勢いよく研ぐめぐる。三人共、俺が視線を送つていることにも気付かず、真剣に料理に向き合つてゐる。

それなのに俺ときたら、さつきまで少しの間とはめぐるの腕に包まれていた事実を今更ながらに思い出し、悶々としてしまつっていた。あの感触は到底忘れられそうにない。

身体は女になつてしまつたが、どうやら心はまだ男のままのようだ